

「少子化とコロナ後を見据えた工芸人材の育成環境

－専門校生へのアンケート調査等－

前田厚子



少子化とコロナ後を見据えた工芸人材の育成環境
専門校生へのアンケート調査等
同志社大学創造経済研究センター
前田厚子*

An Environment for the Human Resource Development of Craft Artists in
Anticipation of the Declining Birthrate and the Post-COVID-19 Era:
A Questionnaire Survey of Vocational School Students
Atsuko Maeda, Ph.D. *

要旨:

業界の長期不振と少子化に加えてコロナ禍の影響により、工芸人材の確保や就労条件は、今後ますます悪化する懸念が大きい。そこで、国内の先駆4地域に所在する工芸家育成機関及び在籍生の属性を10年前と比較して、育成環境の現況把握と緊要な育成課題を明示することとした。調査方法は、関連する専門技術研究所(以下「専門校」)7校の在籍生へのアンケート調査と約10年前に卒業或いは自立した若手作家への経歴調査等を情報源とするパターン分析とした。その結果、次世代を担う工芸家の新たな属性が地域性に影響されつつも顕在化し、それらのニーズに呼応する育成環境の整備が緊要であることが判明した。

キーワード:

専門教育、工芸、専門技術研究所、多様性、国際性、少子化、コロナ禍後

Summary:

This study presents a dynamic analysis of the attributes of vocational schools and their enrolled students, which are responsible for the sustainable development of regional culture and arts at a time when the COVID-19 pandemic and declining birthrates in Japan have exacerbated the shortage of successors and worsened working conditions. The analysis is based on a questionnaire survey of students enrolled in specialized vocational schools, where specific craft fields are said to symbolize regional culture, as well as on a portfolio survey of graduates and others, and examines the intersection of spatial and temporal axes.

Key Words:

Professional Education and Training, Vocational School, Diversity, Internationalization, Post-Pandemic, Declining Birth Rate

*E-mail: a-maeda@xa.catv.ne.jp

July, 2023

謝辞: 本研究成果は、独立行政法人日本学術振興会 (Japan Society for Promotion of Science)による科学研究費助成事業 No.19K23236(公式サイト研究成果報告書参照) 及び 22K13023 に基づくものです。また本調査にご協力頂いた各組織の教職員、在籍生、卒業生にはこの場をお借りして改めて深謝いたします。

I はじめに

コロナ禍の影響により、製陶器産地界隈における関連企業の経営¹⁾や文化施設の運営はこれまで以上に困難な状況に直面し、工芸技術者を目指す若者の就労や活動の機会も余儀なく限定された。一方、工芸や製品デザインといった造形表現(ものづくり)を専攻する芸術系大学(以下「芸大」)の学生に関しては、大学院や専門校²⁾に進学ではなく、業界大手企業への就労、或いは大学受験では市場性や費用対効果が高いデジタル分野を選択する志向が、加速されてきた³⁾。その反面、調査したコロナ禍においても、専門校を1代(10年位)前に卒業或いは自立した現在30歳~40歳代の工芸家で、国内外のアートイベントやオンラインの展示販売を通じて以前と同等或いはそれ以上に活躍している事例は少なくはない⁴⁾。

かつてピオレとセーブル (Piore & Sabel, 1984) が唱えた「クラフト的生産体制における柔軟性と専門化」は、生産要素の再配置によって生産から販売過程を絶えず改造していく産業構造であり、専門性の知識習得と経験知の蓄積が、革新をおこす起爆剤だという。そして、従来の家族企業における第2世代以降の育成環境は、大学での専門教育を一通り終えたのちに、家庭環境で経験知を積み重ねてきた。しかしながら、前述した20世紀末以降の社会情勢を受けて、国内工芸品産地における家族企業や家系関係者は、減少の一途である。のちにマークセン (Markusen, 2006) は、家族企業の産業集積では国際化、雇用、革新への課題が多く、地域に定住する芸術家の社会活動が、これらの課題を打開しないかと唱えた。確かに、コンテンツ産業や現代美術の人的研究に関しては、多くの研究者によってその実証が試みられてきた。しかしながら工芸分野の同等研究は、作家、デザイナー、職人の職業区分が、地域性、個々、帰属機関や世代によって一律化が困難な背景もあり、大きくは進展していない (2021, 前田)。したがって本論では、マークセンがいう芸術家を、創造性や多様性を保有する次世代の工芸家(作家、デザイナー、職人の技術者)と定義して、このような工芸家が育成される革新的な環境に関する議論を進めることとした。

以上の事情により、本研究の関心疑問は、「特定の工芸分野を対象とする先駆的な国内専門校とその在籍生において、どのような属性が10年前と異なって特徴づけられるだろうか」である。その方法は、異なる都市や地域に所在する工芸専門校の在籍生へのアンケート調査と過去10年間に関する入手資料を情報基盤とし、育成環境の人的及び社会的な属性を具体化した。そして少子化とコロナ禍の影響を踏まえつつ今日と10年前との事例を比較することにより、地域を象徴する芸術文化と関連産業の次世代を担う育成環境への緊要な課題を提示したい。一律の統計資料ではなく、国内複数の地域と教育現場より直接入手した最新データの分析並びに早急な情報開示が、本研究の意義であり独自性である。

II 調査方法

本調査の先行例として、バーク (Burke, 1986)は、イタリア・ルネサンス期の芸術家ら600名を、出身地、家系、支援制度や嗜好者を評価指標に、文化的な革新が外部との人的交流より生みだされる社会構造や創造環境の仕組みをパターン分析した。またホール (Hall, 1998)は、アカデミーとしての工房や学校を都市の文化的な革新を担う創造基盤であるとみなし、多数の都市が革新的に繁栄した時代の空間軸(複数の都市)と時間軸(時系列)とを交錯させることにより、創造環境の共通性と相違性を分析した。本調査では、時空間軸を地域性と世代性(10年間)に置き換えた。他方、アカデミーの先行研究として、利光 (2019)は、ドイツの専門教育学校バウハウスにおける芸術と技術との結合による理念、表現、構成の基礎教育と工房様式に基づく実践教育が徹底した合理的な教育法であったと論じており、本調査でも芸大ではなく実学や技術を少数先鋭で指導する上述した専門校を対象とした。

まず、地域性の分析方法には、地域文化を象徴する工芸分野の技術者育成を主目標として、1府2県4

市の地方行政が設置した専門校の在籍生にアンケート調査を実施し(2021年10月～2022年3月;付録1)、2021年度の在籍生における人的属性の共通点と相違点を明らかにする。次に、世代性の分析方法には、アンケートの回答結果より抽出した顕著な共通要素に焦点を絞り、関係組織からの入手資料及び調査4地域を拠点に活躍する工芸家である卒業生ら(現在30歳～40歳代)の経歴調査(付録2;前田,2021)より得られるデータを参照とした。さらに、教育や文化の事業活動が限定されたコロナ禍にアンケート調査を実施した2021年度(2022年3月現在)、上述した工芸家が卒業若しくは独立した頃である10年前の2011年度、コロナ禍の影響がない直前の2019年度を評価軸として、人的属性の顕著な変移を読み解く。このような4地域における世代性を考慮した時系列分析により、今日の工芸教育環境における社会的属性の共通点を把握し、次世代への工芸人材の育成に関する課題を明示する。

なおアンケート調査の手順は、次のとおりである。最初に、特定の工芸分野で国内先駆例といえる京都府、京都市、岐阜県、多治見市、石川県、金沢市、富山市が設置した専門校の在籍生(約200名)に同等20問のアンケート調査(有効回答数161/配布数183名)を2021年10月から2022年3月まで順次実施した(付録1)。それら専門校の名称は、設置した自治体を意図するが正式名称ではない。そして、年齢(年代)、性別、研修コース、出身地、最終学歴、家庭環境、職歴、海外滞在歴、希望進路や、カリキュラム/公的支援制度/地域定着/公立の美術館/(自立支援)工房/公募展への関心度といった人的属性における共通点を顕在化させる。他方、調査対象地域を拠点に国際的に活躍する現在30歳～40歳代の卒業生ら合計63名に対する経歴調査⁵⁾(付録2)は、工芸家本人の公式サイト、帰属団体、展覧会主催者が公開するポートフォリオや本人へのヒアリング調査から抽出した情報を基盤とする(前田:2021,2022)。このように、4地域に所在する専門校の世代性(10年間)における考察においては、人的属性のほか専門分野自体の特色、自治体の規模や政策、風土といった社会的属性を考慮して結論を導いていく(付録3)。

最後に、コロナ禍が収束してインバウンドの観光産業が再生され、教育や文化に関わる国際交流事業が以前同様に開催される際には、今アンケート調査の結果は、コロナ禍限定の一過性なデータも含まれた可能性もあり、見直す必要がある。

III アンケート調査等に基づく専門校在籍生の属性

前章で説明した7校の在籍生対象に、同等20問(付録1)を質問した回答結果から数量比較できる属性の項目及びそれらの根拠となるキーワードを、記述回答より抽出して一覧にした(表1;表2;付録1)。

有効回答数161(回収率:88%)に対する各属性の総平均値は、次のとおりである。年齢(年代)別比率は、20歳代が54%、30歳代が24%、40歳代以上が13%、10歳代が9%である。性別比率は、女性が72%、男性が27%、無回答が1%である。出身地比率は、府県内が28%、隣接府県が15%、その他が57%である。最終学歴比率は、大学卒が50%、高校/専門校卒が36%、大学院卒が14%である。専門分野の家系関係者率は14%で、他のアート/デザイン分野同等率も14%である。専門職経験者率は19%で、大学、工房、工芸教室の助手や講師が大半である。専門研修に限定しない海外滞在歴者率は、11%である。調査時の進路希望上位3件は、作家、進学、事業所/工房である。卒業後の定住希望者率は43%、出展歴者率は30%である。

表 1 特定工芸分野の専門校在籍生アンケート調査回答(2021年度)における傾向分析1

| 設置行政 | n=人数 有効回答161/配布数183名 | 回答/配布 | 年齢(年代) (%) | | | 性別 (%) | | 所属コース (%) | | 出身地 (%) | | | | 最終学歴 (%) | | | 家庭環境 (%) | | | 専門分野の職歴 (%) | | 海外歴 (%) | | | |
|-------|-------------------------|-------|---------------|----|----|-----------|----|--------------|----|------------|-----|----|----------|-------------|----|-------------------|-------------|-----|----------------------------|-------------------------------|-----|------------|-----|------|-------|
| | | | 10 | 20 | 30 | 40~ | 男 | 女 | 基本 | 応用 | 別 | 市内 | 県内 他市 | 隣県 | 他 | 高校 専 門 校 | 大学 | 大学院 | 専 門 分 野 家 系 | 他7- 10 分 野 家 系 | 有 | 関係職(上位) | 有 | 最長期間 | |
| 富山市校 | ガラス造形 | 27/36 | 22 | 63 | 11 | 3 | 15 | 85 | 78 | 22 | 0 | 0 | 0 | 7 | 93 | 40 | 56 | 4 | 0 | 15 | 4 | 大学助手 | NA | 7 | 半年 |
| 多治見市校 | やきもの*1(デザイン・陶芸) | 17/17 | 6 | 82 | 12 | 0 | 35 | 65 | 30 | 35 | 0 | 18 | 18 | 65 | 29 | 65 | 6 | 12 | 12 | 24 | 製陶業 | 工房助手 | 0 | NA | |
| 岐阜県校 | やきもの(陶芸) | 13/13 | 38 | 0 | 8 | 54 | 69 | 31 | 62 | 38 | NA | 8 | 23 | 15 | 54 | 77 | 15 | 8 | 15 | 15 | 0 | NA | NA | 15 | 1年2か月 |
| 金沢市校 | 陶芸・漆芸・金工・染・ガラス | 25/27 | 0 | 52 | 48 | 0 | 16 | 80 | 0 | 0 | 100 | 12 | 4 | 4 | 80 | 20 | 44 | 36 | 4 | 16 | 44 | 技術指導 | 工房員 | 12 | 3年 |
| 石川県校 | 九谷焼*2 | 26/28 | 8 | 65 | 12 | 15 | 15 | 85 | 42 | 42 | 16 | 8 | 54 | 4 | 35 | 46 | 50 | 4 | 0 | 15 | 4 | 和紙職 | NA | 4 | 3年 |
| 京都府校 | 京焼・清水焼 | 37/46 | 0 | 51 | 35 | 14 | 24 | 73 | 46 | 41 | 14 | 27 | 3 | 38 | 32 | 24 | 57 | 19 | 30 | 14 | 22 | 講師 | 家業 | 16 | 3.5年 |
| 京都市校 | 陶磁器*3,漆工 | 16/16 | 0 | 38 | 31 | 31 | 44 | 56 | 50 | 25 | 25 | 37 | 0 | 19 | 44 | 37 | 50 | 13 | 44 | 13 | 38 | 家業 | 講師 | 25 | 5年 |

*1美濃焼産地では、器/タイル/造形の形態、土器/陶器/磁器/炆器の素材、美術工芸品/生活用品/プロダクトデザインと多種多様な技法、形態、使用目的があり地元では'やきもの'と総称。

*2県内事業所従事者向けの実習科研究生はアンケート不参加のため除外。

*3西陣織、京友禅、染色、釉薬実務者、陶磁器選択履修のコース研究生はアンケート不参加のため除外。

* NAは該当無。

出所：専門校7校へのアンケート調査結果より必要な情報を抽出(2021年10月~2022年3月より順次に調査)

表 2 特定工芸分野の専門校在籍生アンケート調査回答(2021年度)における傾向分析2

| 設置行政 | 対象工芸分野 | 回答/配布 | 志望理由*3 | | | 期待研修プログラム*4 | | | 卒業後の進路希望(一人3つ以内) | | | | | | | 定住希望(%) | | | 出席履歴(%) | | 支援制度期待度(%) *5 | |
|-------|-----------------|-------|----------------------------|------------|--------------|-----------------|-------------------|-------------------|------------------|--------|-------------------|------------------|------------------|--------|--------|-------------|--------|--------|---------|----|------------------|----|
| | | | n=人数 有効回答数161 配布数183 | 1番 | 2番 | 3番 | 1番 | 2番 | 3番 | 進 学 | 事 業 所 *6 | 作 家 機 関 | 教 育 機 関 | 家 業 | 工 房 | そ の 他 | は い | い え | 未 定 | 有 | 無 | 有 |
| 富山市校 | ガラス造形 | 27/36 | ガラスの公立専修学校 | 若手卒業生の活躍 | インフラ・人的な支援 | 外人常勤教員指導 | 海外作家アーティストインレジデンス | 海外研修 | 18 | 0 | 13 | 6 | 0 | 10 | 5 | 11 | 33 | 56 | 19 | 81 | ◎ | NA |
| 多治見市校 | やきもの*1(デザイン・陶芸) | 17/17 | 産地利便性と自由に制作 | 専門家推薦 | 卒業生作品HP内容 | 先輩作家公開講義ワークショップ | 海外作家アーティストインレジデンス | 海外研究生と協同 | 3 | 5 | 9 | 3 | 1 | 0 | 2 | 47 | 12 | 29 | 24 | 53 | 59 | 1 |
| 岐阜県校 | やきもの | 13/13 | 基礎技術知識指導 | 年齢制限無 | 産地利便性指導者の質 | 先輩作家講義 | 海外研究生と協同 | NA | 5 | 4 | 5 | 1 | 2 | 3 | 2 | 15 | 31 | 54 | 38 | 38 | 23 | 1 |
| 金沢市校 | 陶芸・漆芸・金工・染・ガラス | 25/27 | 制作継続 | インフラ・人的な支援 | 発表機会人脈づくり | 自由制作 | 国際展出品 | 海外研修 | 3 | 1 | 22 | 11 | 0 | 6 | 3 | 32 | 12 | 56 | 88 | 12 | ◎ | NA |
| 石川県校 | 九谷焼*2 | 26/28 | 九谷焼の技能向上 | 若手卒業生の活躍 | 地元の工芸に貢献 | 先輩作家との交流 | 海外研修 | 海外作家アーティストインレジデンス | 8 | 4 | 9 | 1 | 1 | 16 | 2 | 62 | 8 | 31 | 23 | 77 | ◎ | NA |
| 京都府校 | 京焼・清水焼 | 37/46 | 繻織技術向上 | カリキュラムの緻密性 | 雇用保険受給可親近者卒業 | 絵付デザイン技能向上 | 海外作家アーティストインレジデンス | NA | 12 | 23 | 16 | 1 | 5 | 7 | 7 | 65 | 11 | 24 | 5 | 95 | 59 | 11 |
| 京都市校 | 陶磁器*7,漆工 | 16/16 | 釉薬研究 | 仕事両立(地元) | 親近者評判 | 多様な技術研修 | 海外生と協同 | 海外作家アーティストインレジデンス | 6 | 5 | 6 | 1 | 3 | 0 | 0 | 56 | 19 | 25 | 25 | 50 | 63 | 19 |

*1美濃焼産地では、器/タイル/造形の形態、土器/陶器/磁器/炆器の素材、美術工芸品/生活用品/プロダクトデザインと多種多様な技法、形態、使用目的があり地元では'やきもの'と総称。

*2県内事業所従事者向けの実習科研究生はアンケート不参加のため除外。

*3富山市、金沢市、石川県の該当校生には、本質問は直接せず全回答より関連事項を抜粋。

*4コロナ禍の影響により国際交流や社会連携のプログラムを体験できていない回答が反映される。また、国際性への興味を模索するためにカリキュラム化されていない該当校にも同様の質問内容。

*5富山市、金沢市、石川県の該当校生には、本質問は直接せず各種支援制度事項や全回答の関連事項より◎(大変良い)と判断。

*6事業所は、窯元、問屋など。

*7西陣織、京友禅、染色、釉薬実務者、陶磁器選択履修のコース研究生はアンケート不参加のため除外。

* NAは該当無。

出所：筆者の専門校7校アンケート調査結果より必要な情報を抽出(2021年10月~2022年3月より順次に調査実施)

1. 地域性や各校における属性分析

工芸分野、専門校、地域の社会的属性を踏まえて、前述した表 1、表 2 における人的属性の傾向を深掘りしよう。

まず国際公募展や国際芸術祭でも活躍するアート志向の高い現在 30 歳～40 歳代の個人作家を多数輩出してきた富山市校、多治見市校、金沢市校の3校を第1グループと区分して、それらの顕著な属性を、次のとおりに述べる(付録 2; 付録 3; 注 5; 前田, 2021)。

第一に、在籍者の年齢(年代)は、後者 2 校には年齢制限もあり、大半の年齢が 30 歳代前半迄である。性別は、富山市校と金沢市校の女性比率が 80%以上と、総平均値 72%よりも高く、全国の著名な芸大相当例⁶⁾と同等である。多治見市校の女性比率 65%と他 2 校との同等差異は、隣接県の愛知県も含む家系関係者の男性比率に相当する(表 1; 付録 1: Q1-2,4,6)。

第二に、在籍者の県内出身者率は、富山市校が 0%、金沢市校が 16%、多治見市校が 18%で、何れも総平均値の 28%よりもかなり低い。金沢市校は九谷焼産地関係者や市内芸大出身者、多治見市校は県内家系関係者が多少在籍するものの、国内三大都市圏を中心に全国から移住してきた志と才能のある若者が主流であると判断する(表 1; 付録 1: Q4,6-20)。

第三に、入学前の教育履歴は、各校の指導方針、専門分野や志望理由と深く関係する(表 1; 表 2; 付録 1: Q3,5,10)。富山市校は、欧米先進機関との交流を基盤に国際環境「グラス・アート・ヒルズ富山」を構築してきた一方で、大学編入制度を有する公立専修学校であるため、ガラスやデザインの専攻を有する芸大を筆頭に大学以上の卒業者が 60%、デッサン力が評価された全国各地の高校/専門校卒業者が 40%である。多治見市校は、全国の著名な一般大学を筆頭に大学以上の卒業者が 71%で、出身大学の陶芸サークル活動や同校卒業生(30-40 歳代)に刺激されて本格的に学ぶ在籍生が、志望理由によると多い(付録 1: Q5,10)。金沢市校は、これら 2 校のほか、芸大学部/大学院の卒業生を筆頭とする専門教育を一通り終えた新進作家が、80%を占める。彼らは、作品制作の継続と工房開設を目標とする一定期間を、工房、奨励金、技術支援、人的ネットワークを確保のうえ、年次計画書に基づいた制作と出展の経験知を蓄積していく(付録 1: Q10-20)。また、富山市校や多治見市校の卒業生が金沢市校に進学したり、金沢市校ガラス専攻の卒業生が富山市校の助手(嘱託期間: 3 年)を務めたりと、隣接県の都市をまたぐ創造環境の非公式な連携体制により、長期にわたる人材育成のシステムが普及してきた(前田, 2022)。

第四に、在籍者の進路希望や地域定住希望の割合は、今日の社会情勢及び所在地域、工芸分野や在籍生の特性と深く関係するので、それらに言及しながら属性を読み解く。まず、コロナ禍の観光・飲食業の不振が工芸産業の不況と後継者の減少を加速させた現況(2021 年度)では(注 1)、志と潜在能力が高い若者の地域移住とその多様な活躍は、地域の創造環境に持続的な活力や後継者を生み出す。しかしながら、彼らの大半が、専門分野の家庭環境で得られる工房施設、安価な機材調達、制作販売関係者とのネットワークといった便益を持ち合わせていない。したがって、技能や経験の発達度に応じた最適空間に定着する傾向にある(前田, 2021)。まず富山市は、ガラス造形の国際交流が活発な富山市校、ガラス工房、ガラス美術館の三つを世界で唯一有するガラス都市に発展してきた過程において、国内外のガラス美術館や教育機関で活躍する現在 30～40 歳代の作家が、継続的に輩出されるようになった(前田, 2022)。ただし、コロナ禍における富山市校の国際交流は、それ以前に入国した海外教員による演習授業と、国内在住者のアーティストインレジデンス(以下「AIR」)に限定された。そのため、カリキュラムの中核をなす国際交流プログラムを、例年通りには体験出来ずに卒業する在籍生も多い(表 2; 付録 1: Q12-13)。さらに、ガラス造形を富山市校で初めて本格的に、或いは生活用品ではない造形作品を制作するガラス

作家の卵にとっては、個人工房や隣接するガラス工房の現規模では生計が確保できる定職には就き難く、技能の発達度に応じた経験を蓄積できるギャラリーやアートイベントも市内には十分に整備されていない。在籍者へのアンケート調査(表 2; 付録 1:Q1,15-20)と卒業生や教員へのヒアリング調査(前田, 2022)によると、他の工芸分野よりも必要機材や工房維持の負担増、一貫作業や大型制作には人手が必要なこと、近年の記録的豪雪による頻繁な交通障害等に対して大都市から車を所有しない学生の定住は生活の不便さや制作活動への影響をより感じる事、海外への進路希望、奨励金を毎月受給できる金沢市校での研修希望、将来設計を具体化しづらい 10 歳代の比率差が起因して、在籍半ばにおける卒業後の定住希望回答者が 11%と他の 2 校に比べると 1/3 以下である。また定住希望の未定者比率も金沢市校と同値の 56%で多治見市校や全校平均値よりも高い。しかしながら、全国で活躍する作家の活動経歴を一見しても、富山市校の教員や助手のほか富山市内で制作発表を頻繁にしない作家は見当たらないほど、魅力的な環境なのである。次に美濃焼産地内では、多治見市は流通事業所の集積地と位置づけられ、手工芸の主な技術者は製陶事業所が雇用する製品デザイナーである。したがって、多治見市校卒業生の大半は、産地内諸都市に所在する事業所に就業するか、ろくろ成形等のアルバイトをしながら作家活動を継続するのが、一般的である。また機材を安く入手できる大手産地の利便性も志望理由であるとおろ、多治見市校の県外出身者総数は少ないが、在籍者の地域定住希望率は 47%、未定同等率は 29%と、卒業後も現地での制作継続を覚悟して入所した在籍者が、他 2 校よりも多い⁷⁾。そして金沢市では、技能と経験に応じた公的支援のほか、工芸作家が出品できるアートイベント、美術館やギャラリーの数は、現在活躍している 30~40 歳代の工芸家が卒業したのちの過去 10 年間で急増している。ところが、北陸圏外出身者が 8 割を占める金沢市校在籍者における卒業後の定住希望率は 32%であり、前章で論じた在籍者総数の平均値である 44%、同校卒業生の同等比である 50%(前田,2021)よりも低い。アンケートの回答結果(付録 1;Q11,16-20)から判断すると、近年の記録的な豪雪豪雨への出身地とは異なる生活の不便さや、コロナ禍以前よりも将来設計に対する不安が強くなった懸念もある。定住希望の未定回答率は、富山市校と同値の 56%で、多治見市の同等比率の 29%よりも相当高い結果となった。

次に、製陶事業所就労者(職人)の育成を歴史的には主目標としてきた京都市校、京都府校、岐阜県校、石川県校を第2のグループと区分して、それらと国内外で活躍する若手作家が多数輩出される第1グループとの人的属性における異質性を、次の通りに述べる。

第一に、在籍生の年齢(年代)と性別は、各校とも制限規定はないが後述する教育歴、職歴、志望理由、各校の指導方針、今日の社会情勢と関係する(付録 1:Q1-3,5-8,11)。岐阜県校の現況は、入学前の学歴や職歴は専門分野ではないが大学卒で多様な経歴者が中心である 40 歳代以上が 54%、母体の工業高校卒業生を主とする 10 歳代が 38%で大半となる。京都府校の現況は、専門教育の未経験者を中心に 20 歳代が 51%、30 歳代が 35%、40 歳代以上が 14%で 10 歳代が 0%である。京都市校の現況は、在職者の生活様式への配慮や専門プログラムの選択履修が可能な指導体制への移行(2021 年)により、20 歳代が 38%、男性比率が高い地場産業の在職者や後継者を筆頭とする 40 歳代以上と 30 歳代が各 31%、10 歳代が 0%である。石川県校の現況は、応用コースにおいては美術工芸、生活工芸、製品デザインのプログラム選択が可能な柔軟性や卒業後の支援体制が充実していることにより(2021,前田)、20 歳代が 65%、40 歳代以上が 15%、30 歳代が 12%、10 歳代が 8%と多様である。次に女性の比率は、岐阜県校が 31%、京都府校が 73%、京都市校が 56%、石川県校が 85%である。女性の比率が総平均値 72%より大幅に低い岐阜県校は製陶業の家系関係者に男性の比率が高く、総平均値よりも高い石川県校は、同業の家系関係者が調査時には不在であった(付録 1:Q1-3,6)。

第二に、府県内出身者率、進路希望、定住希望は、所在地域の地理的特性、文化土壌、各校の伝統や指導方針、今日の社会情勢と深く関係し、大半が国内三大都市圏から移住のうえ国内外で活躍する若手作家が多数輩出される第1グループの3校とは大きく異なる(付録1: Q4-20)。京都市校の現況は、製陶事業所や教育訓練施設での経験者や在職者を筆頭とする市内出身者が37%、府内他市出身者が0%、兵庫県や奈良県の関係者を筆頭とする隣接府県出身者が19%で合計56%が通学圏内者である。次に京都府校の現況は、家系関係者も含む市内出身者が27%、府内他市出身者が3%、若者の人口数や教育機関数も起因となって大阪府出身者が3割を占めるほか兵庫県や滋賀県等の隣接府県出身者が38%で合計68%が通学圏内者である。その他全国からの出身者32%が、専門教育は未経験であるが多様な教育歴と職歴の保持者や各産地の家系関係者で占められる。そして石川県校は、家系関係者ではないが九谷焼の継承発展に貢献したい志望理由(表2)を筆頭とする県内出身者の62%が、通学圏内者であり定住希望者の比率に匹敵する。ところが岐阜県校は、家系関係者や母体工業高校卒業生を中心とする県内出身者が31%で、名古屋都市圏等隣接県出身者が15%で、合計46%が通学圏内者となる。他地域出身者である54%は、卒業後の進路や地域定住を現時点では定めきれない結果であった。また多治見市以外の県内と名古屋都市圏の居住が38%で市内相当率の5倍弱となり、両地区での就労希望者も多いことにより、岐阜県校の多治見市内定住希望者は、15%に留まる。

第三に、入学前の教育履歴は、今日の社会情勢、進路希望、各校の指導体制、所在地域の特性と関係し、次のとおりである(付録1: Q4-5,8-9,15-20)。京都市校の現況は、全体の63%を占める京都府外の出身者には、京都に長期滞在して日本語が読み書きできる東アジア出身者が数名おり、一般大学の学部/大学院を中心に大学以上の卒業者は63%と高い。また、専門研修に限定されない長期海外滞在歴者も複数見られる。これらの国際人材は、進路希望に作家や教職員を選択している。次に京都府校は、一般大学の学部/大学院を筆頭に大学卒業者が76%、実務経験者が22%を占め、専門研修に限定されない長期海外滞在歴者が複数にみられる。このような在籍生の進路希望は、作家のほかイベント企画者、事業所デザイナー、事業所職人と多様である。職人や作家とも異なる新たな職種希望者の在籍は、2021年度に指導目標が「陶磁器業界に限定されない多種多様な世界との交流・連携にチャレンジする人材」に改定された一例に相当しよう。またアンケート調査(表1,付録1: Q4)や事業概要から判断すると、大阪等からの通学や京都市内の家業や事業所に勤務する在籍生数が他地域校より高い割合であること、国際文化都市京都のブランド性も定住希望者率(表2)を上げている。但し、校長へのヒアリング調査⁸⁾によると、京都市内における陶磁器事業所数の経年減少とともに、コロナ禍の長期化が求人削減を加速させ、全国の業界ネットワークを活用した京都以外の職場斡旋は、半数以上に増加したという。一方、岐阜県校は、母体の工業高校卒業生が4割である。また半数強を占める県外出身者は、高校/専門校卒、大学卒、大学院卒と様々であり、社会人学生で陶芸以外の目的で海外に渡航歴がある者も数名いた。石川県校は、家系関係者ではないが九谷焼の継承発展に貢献したい県内出身者(62%)が、高校/専門校卒、芸術系大学、一般大学卒を問わず、また首都圏が大半な県外出身者(35%)は、40歳以上、女性で芸術系大学卒、一般大学卒あるいは大学院卒である場合が多かった。これらの40歳以上、高学歴、社会人の属性要素は、次節以降の世代性にて深掘りしたい。

2. 世代性(過去10年間)における属性分析

調査した7校から同等の情報を得られた3校を選択する。そして、経歴調査をした30歳～40歳代の1代先輩が卒業或いは軌道に乗り始めた時期に該当する10年前の2011年度、コロナ禍直前の2019年

度、アンケート調査を実施したコロナ禍である 2021 年度における人的属性を、地場産業の体質や景気に影響されやすい組織体制順(後者ほど造形作家や起業家を輩出)と推測される京都府校、多治見市校、富山市校の順に分析する。

第一の京都府校⁹⁾においては、2011 年度の総定員数は 60 名、応募者総数は 126 名で合格者総数と入学・進級者総数は 60 名で女性比率が 57%、卒業生数は 46 名である。コロナ禍直前の 2019 年度相当数が 8 年前と大きく異なる事項は、応募者数の半減、女性比率の 9%増、卒業生数の 2 割減である。次に、コロナ禍である 2021 年度に応募者数は 62 名、合格者数は 40 名、入学・進級者数は 47 名、女性比率が 70%となって 10 年間で 13%増、2 年間で 4%増である。2011 年度入学者の最終学歴は、短期大学(以下「短大」)卒以上が 58%で女性比率が 63%、高校卒が 40%で女性比率が 50%である。同様に 2019 年度相当数は短大卒以上が 53%で女性比率が 61%、高校卒は 47%で女性比率が 72%である。2021 年度の相当数では、短大卒以上がコロナ禍の 2 年間で 19%増であるが、一般大学の大学院を卒業して専門分野に限定されない職歴や海外滞在歴を有する創造的な社会人が複数在籍する。同校が指導目的を 2021 年度に変更した「陶磁器以外で活躍する創造的人材」や「創造的な職人」に合致する属性である。同年には、意匠の創造性を養成する 2 年制の絵付デザイン科が開設される等のカリキュラムも大きく改革された。2019 年度の年齢(年代別)比率は 10 代が 9%、20 代が 36%、30 代が 42%、40 代以上は 13%で、2021 年度の同比率は、10 代、30 代が減少して 20 代が 17%増加している。そして京都府校は、在職者の多くが 40 歳以上を占める京都市校とは異なり、高学歴者で他分野から挑戦する 40 歳以上の女性の増加が近未来に向けた注目点である。優れた若手作家らの輩出が顕著な実績である多治見市校や富山市校とも異質な属性である。他方、職業能力開発校としてのネットワークによる就職斡旋には定評があり、入学・進級生の 2019 年度府内出身者率は 44%、府内就業者率は 46%、求人事業所数は 55 件(翌年 2020 度は 37 件)、求人数は 63 名(翌年 2020 度は 44 名)、就業率は事業所や自営等が 89%、就活方法は学校の紹介が 68%である。ところが、コロナ禍 2021 年度の府内出身者率は 33 (32%)¹⁰⁾となり、コロナ禍の過去 2 年間における地元入学者数は 11(12) %減である。この期間は、観光や飲食の産業不振により数名の家族企業が多くを占める京都市内の事業所求人数は前述したように激減傾向であった。ところが、同校の全国業界ネットを通じた斡旋努力により就業率は絵付デザイン科を除くと横ばい状態である。就業先斡旋の成果は結果的にはほぼ例年通りであったが、就業後のキャリア発達は追跡しておらず、今後の課題だという¹¹⁾。

第二の多治見市校¹²⁾においては、2011 年度の総定員数は 43 名、セラミックスラボコース¹³⁾3 名も含む入学定員数及び入学者数 23 名で女性が 70%、県外出身者が 78%、最終学歴は短大以上が 87%である。コロナ禍直前の 2019 年度入学定員者数は、2015 年度以降に外国人特別枠が同ラボコースに追加されて 26 名、入学者数は同ラボコース 13 名を追加した 24 名、女性は 63%、県外出身者は 88%、短大以上の卒業生は 79%である。2021 年度アンケート調査の実質在籍者は 17 名で、2011 年度や 2019 年度の相当数より半減している。この理由は、同副所長によると¹⁴⁾、少子化や地場産業の不振とともに、競合する専門校の表出、若者の造形から平面へのデザイン志向増、何よりも 2 割を占めていた海外研究生の不在に起因するという。国際陶磁器フェスティバル美濃や国際陶芸アカデミー(IAC)といった継続的な国際交流を媒体に、近年は上述したセラミックスラボコースの特別枠を利用する海外研究生が相反して増加傾向であったが、コロナ禍の影響を受けて、2019 年度は 6 名で 2021 年度は不在であった。

第三の富山市校¹⁵⁾においては、伝統的な工芸産業の発展を担う職人や事業所就労を進路希望とする応募者は、アンケート調査の回答(表2; 付録1:Q1,3-6,10-11,15-16,20)を見る限りいない。むしろ、若者が今日好むデジタルアート分野との競合性、少子化、将来設計の不安、費用支払者の経済状況が応募

者数や応募者の質に影響を与えている。2011年度の造形科(基本コース)と研究科(応用コース)の総定員数は40名、入学定員数は20名、応募者総数は28名である。入学者数は20名で、学歴は短大卒以上が75%、高校卒が25%である。2019年度に応募者総数は全体では7%減の26名である。入学者数は18名で、学歴は短大卒以上が61%、高校卒が39%で、短大卒以上が14%減少している。2021年度に応募者数は、海外から応募できない状況ではあったが総数で30名、入学者数は20名、学歴は短大卒以上が70%で、県内出身者率は例年平均で1割である。コロナ禍以前は海外出身者が1割、他に研究科卒業生または同等以上のレベルを対象とする研究生が2名ほど在籍した。応募者の合格率は、造形科では開設年度1991年以降15年間は3~7倍であったが、2019年度は1.4倍、2021年度は1.5倍の経年減少である。その反面、研究科への進級応募者数は2.2倍とコロナ禍で増加傾向となり、定員枠の4名が1名増員となった。その背景は次のとおりである。2011年度では、大都市圏の芸大及び短大の卒業生が応募者の多くを占めた。それらの卒業生が、日本随一のガラス育成環境で才能を開花して、国際的に活躍するガラス作家に今日成長してきた。¹⁶⁾ところがそれ以降は、造形表現(ものづくり)分野を専攻する大学生は減少傾向となり、少子化とコロナ禍とも重なる近年においては、芸大の志願者数、造形表現部門の志願倍率、学部卒業後の進学率の低下が、陶磁器(陶芸)やガラスの学科・専攻を有する芸大の応募状況にも顕著にみられるようになった(注3)。それに反比例してこの数年間は、造形科から研究科への進学希望者が増加し、志とデッサン力がある全国の10歳代が大学編入も可能な専修学校である富山市校を選択する傾向にある。とはいえ、同地域の育成機関や工房で講師や助手に就くまでには相当の技量と経験を要する。また作家活動を始める将来設計を自己資金で担うには、若輩ほど課題や不安が大きい。したがって、出身地から遠隔地の専門校を卒業後も地域定住を希望するかの質問には、前述したことに加えて、出身地とは異なる近年の記録的豪雪による日常生活や制作活動への影響も回答にあげ(表2; 付録1:Q10-11,15-16,20)、半数以上が通学圏を出身地とする京都の在籍生とは状況が大きく異なり、未定の回答が56%と高い。

3. 地域性と世代性における考察

地域文化を象徴する工芸分野の美術振興、産業振興と人材育成の3点が先進的に稼働している4地域に所在する7つの専門校在籍生の人的属性について、アンケート調査を実施した2021年度(III-1.)、経歴調査を実施した30歳~40歳代である工芸家の卒業から自立時にあたる10年前の2011年度と、コロナ禍の影響がないアンケート調査直前の2019年度(III-2.)の考察結果より、先駆的な工芸育成環境に共通する人的及び社会的な属性を顕在化しよう。

富山市校を除く他の6校は、伝統的な工芸品産地界隈に所在する。ところが家系関係者や造形表現(ものづくり)を専攻する芸大学生が経年減少となる反面、環境社会で重視される有機素材を用いた表現技法やデザインに優れた工芸品は、世界主流のアートやデザインの市場で高評価され始めてきた(外館, 2016; 前田, 2022)。そして、比重や経緯は各専門校や地域によって異なる分析結果であったが、過去10年間で、次の人的属性が顕著に台頭してきた。(a) 地域外の大都市圏出身者を中心とする志が高く潜在能力のある若者、(b) 女性、(c) 外国人、(d) 制作者と兼業する教職員希望者、(e) 年齢制限が無い場合は40歳以上の社会人、(f) 特定技術を研磨したい在職務者、(g) 工芸分野以外の職歴経験者、(h) 長期海外滞在歴者、(i) 制作者以外の工芸専門家を指すための基礎技術習得希望者である。これら9項目のうち3項目以上をともに保有する7校の在籍生は、アンケート調査の実施時には、III-1.で(表1; 表2; 付録1:Q1-10,15 記述回答)分析したとおり大半に及ぶ。特に、10年前から過去2年間のコロナ禍で加速

された異質な点は、次の項目である。アート志向の高い現在30～40歳代を多数輩出してきた第1グループの富山市校、多治見市校、金沢市校においては、上記項目の (a), (b), (d) である。他方、製陶事業所就労者(職人)の育成を歴史的に主目標としてきた第2グループの京都市校、京都府校、岐阜県校においては、(a), (b)のほか (e), (g), (h), (i) を保有する在籍生が、地場産業の事業所雇用数や家系関係者数の減少と反比例して増加し、人的属性における多様化が顕在化されてきた。職業能力開発校の京都府校においては、人的属性の多様化に対処して、「創造的な職人」「陶磁器以外でも活躍する創造的人材」と、育成目的に創造性が掲げられたのである(2021 年度) (III-2.)。言い換えれば、これら全ての属性における共通点は、他地域から移住する志とチャレンジ精神が旺盛で、作家、デザイナー、職人を既存概念で線引きしない創造的な工芸家であり、他業界に就労する家系関係者や芸大卒業生の男性がこのような属性に代替されてきている(注 5-6)。

ところで最初に、(a)～(d) の増加傾向は、偶然に生じた結果ではない。国際化や創造性を重視する専門校が、国内外の関係機関や応募候補者に指導内容や業績を、公式サイト、書面、人的交流で紹介する情報発信力と、そのためのシステム構築に起因する。まず、富山市校では、海外作家による日常指導やAIR、海外短期留学制度、研究科(応用コース)修了相当者以上である国内外研究生の募集制度、大学編入が可能な専修学校としての授業内容が上げられる。次に多治見市校では、通常コース修了相当者以上を研究生とするセラミックスラボコースに外国人特別選考を設置し(2017 年度～)、金沢市校では市の補助金による短期海外研修制度のほか AIR 施設(2019 年 11 月～)を整備して、国際交流を拡充している。これら 3 校の公式サイトは、日本語英語による二か国語の表記となり、応募要項、カリキュラム、在籍生や卒業生の活動業績が、世界に情報公開されている。さらには、見学や公開講義によるキャンパスの開放、国内外の育成機関や業界関連団体及びイベント招聘者を通じた積極的な募集 PR、各種支援制度も実施されている。それらの効果は、志望理由、期待する研修プログラム、支援制度への回答(表 2; 付録1:Q10-14 記述回答)、卒業生の経歴調査(付録 2)からも、十分判断できる。

一方、年齢制限を条件づけない他の 4 校のうち京都市校では、観光文化都市で且つ若者人口の多い関西圏内の利便性により、国内長期滞在者で且つ日本語が堪能な外国人生(c)が通常コースに複数在籍している。京都府校と岐阜県校では、海外長期滞在歴保有者(h)が、研修修了後にアカデミック或いはクリエイターといった関連職(i)を希望する萌芽もみられる。またそれらの大半は、女性(b)であり、40 歳代以上の社会人(e)に多くみられる(付録 1:Q1-4,8-10,15-20 記述回答)。

言い換えれば、国内の少子化や後継者不足の課題を持続的に緩和する手段として、海外や地域外からの志が高く優秀な人材の確保、基本/応用コースの修了または同等以上の経験者を対象とする特別コースの設置、制作技術者以外の芸術文化産業や地域社会に寄与する創造的人材の確保と育成が、必然的にシステム化されてきた。他方、新幹線が開通(2015 年～)して、芸術文化事業が観光産業の進展に連鎖された石川県では、業界関係者ではない地元の若者が、地域文化資源を基盤とする地域活性化や先輩工芸家の活躍に刺激されて石川県校に応募する事例として、近年では増加しつつある(前田,2021; 表 2; 付録 1:Q1,3-8, 10,14-15,20)。

さらには、石川県校、金沢市校と同様に、岐阜県校では、金沢の芸大出身者が教員として長年にわたって関与しており、同大学内の基礎教育であるデザイン講義及び社会実習から英会話までが、カリキュラム或いは個々の指導の一部に組成されている。すなわち、利光(2019)が論じるドイツ・バウハウスの教育理念に通じる専門分野に特化しない共通知識として、今日必要とする美術デザイン教育と、少人数の工房様式による社会体験を通じた実技演習の双方が、重視される指導法である。20 世紀中期以降のチェコや

米国の育成システム¹⁷⁾をモデルにした富山市校のカリキュラム構成やそれらを熟知した教員の配置も、同分類と察せられる。

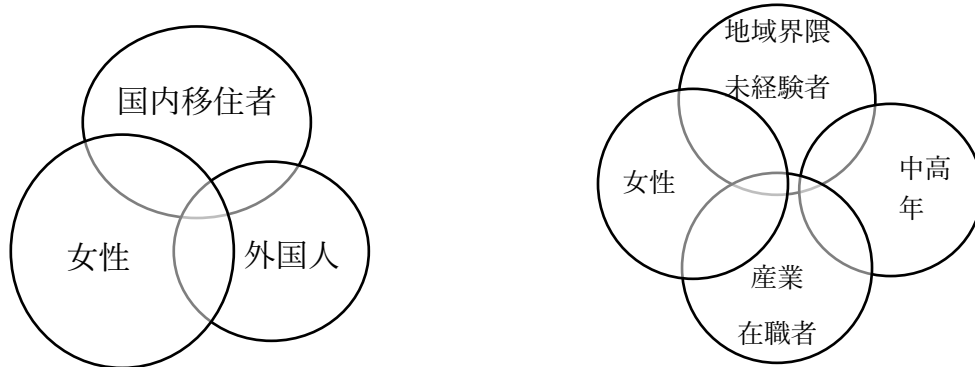
このように、ものづくり全般に対する理論と専門技能を合理的に習得することにより、優秀ながら未熟な専門技能の効率的な開発と多様な発想力を持ち合わせる創造的な工芸家や工芸関連人材の育成が、大学教育以外で実施され始めてきた。以上、今回の調査分析においては、このような動向がこれら専門校の社会的帰属性である。

IV 結論

本研究は、工芸産業界の構造的不況と少子化にも影響される後継者不足や就労条件の悪化をコロナ禍の影響が加速させる懸念により、地域を象徴する芸術文化を革新して創造していく技術者の育成機関及び在籍生の属性について、4地域7校にアンケート調査を実施した。そして、コロナ禍の現在、コロナ禍直前、1代前ととらえる10年前を、30歳～40歳代である工芸家の経歴調査(付録2)、関係者へのヒアリング調査や各公開資料を補足して時系列に分析した。その結果、図1における創造性と国際性が育まれる次世代作家の属性と、図2における地域性豊かな今日以降の産業人材の両属性を考慮した2種の育成環境の整備が緊要であると、本調査を終えて提案する。

これら2種の教育環境の並列形成が、芸術文化、関連産業、人材育成を相乗的に進展させる今後の成功要因ではないかと、今後の研究における課題とする。

図1 次世代の工芸作家を目指す属性傾向 図2 今日以降の工芸産業を担う属性傾向



これまでの文化経済学の研究では、「よその」(糸野,2010)とよく言われる国内移住者やフロリダ(2002)が唱えた「クリエイティブクラス」の一種である ITC 産業に関わる従事者に関しては、頻繁に議論されてきた。他方、女性(b)、外国人(c)と社会体験の豊かな中高年(e)が、専門教育を習得した後に活躍できる社会環境の分析については、まだまだ未開拓な領域である。2022年「ヴェネチアビエンナーレ」のテーマはジェンダーであり出品者200名の9割が女性であるように、これら3要素(b, c, e)は、次世代の芸術文化と関連産業の創造には必要不可欠な担い手である。前述した国内主要の芸大や議論した専門校では、女性の在籍生及び若手卒業生の比率は、極めて高く(表1,付録2,注5-6)、卒業後も個人作家としての国際的な活躍は著しい(付録2)。ところが菊池(2022)が言及するように、芸大や専門校の工芸分野に携わる常勤教職員、重要無形文化財保持者(人間国宝)、代々継承される窯元後継者の経歴をたどると、工芸分野によって程度は異なるが、女性の割合や位置づけは伝統的な枠組みほど極めて低く、今後の改善が期待されるところである。

また国内に長期滞在する外国人作家、中高年、高学歴で海外長期滞在歴を有する在籍生の大半は女性であり、年々減少傾向である家系関係者の大半は男性である(表1; 付録1:Q1-5,9)。すなわち、後継者の確保と継続的な革新を生み出す知識を必要とする既存環境には、志とチャレンジ精神が大きい移住者、女性、外国人、中高年が新たな構成要素となり、コロナ禍を挟んだ今日以降の育成環境には、新たな属性であるジェンダー、国籍、年齢を考慮した育成環境の再構築が緊要である (Piore & Sabel, 1984)。

他方、石川県校在籍生の志望理由にあるように(表2)、県内における美術館やアートイベントを媒体とする地域の活性化と工芸家(個人作家、窯元・事業所従事者)である卒業生らの活躍に刺激されて、家系関係者や経験者でない地元出身者が地場産業界に進路志望する若者の育成とそのシステムづくりも緊要である。

V おわりに

社会的属性の課題として、支援と年月を要する次世代工芸家の成長には、関係する近隣地域の創造環境との連携強化、地域発展と作家の双方に便益のある情報発信の場(美術館、ギャラリー、公募展、アートやデザインの祭典)の国際化と多様化が、在籍生のアンケート調査及び卒業生らの経歴調査から判断して、重要な成功要因である(表2; 付録2)。一つの専門校や地域内で年月をかけて大家に育成するには、コロナ禍後の社会情勢に反発する教育と指導者双方の質、美術館、ギャラリー、工芸イベントの情報発信力と職員双方の質の担保が維持されにくいと察せられるからである。一方、1代前のお手本や刺激となる卒業生らの国際的な活躍や前述した情報発信の場を媒体とする多様な地域活性化が可視化されれば、地場産業の後継者確保や地域文化の持続的発展にも連鎖されよう。

今回は、4 地域に立地する専門校在籍生へのアンケート調査における人的属性に関する回答を、約 10 年(1代)前に卒業或いは活躍し始めた卒業生らの経歴調査や関連組織からの入手資料を参照として分析した。今後は、海外先進事例との比較分析により、次世代の教育環境への課題解決策を提案できる結論を導きたい。かつて明治期においては陶磁器やガラスの生産技術指導者でもあったドイツ人ワグネルは、有田、京都、東京に招聘されて工芸技術の近代化に向けたシステムづくり、その人材育成、万国博覧会を筆頭とする市場への出品指導を担った(三好, 2004)。20 世紀半ばになると、ドイツ(工芸職業学校やバウハウス)やウィーンの工芸教育の影響を受けたチェコ・プラハにおいては、地域の伝統を象徴するガラス工芸を現代美術として振興、ボヘミアングラスを筆頭とする産業振興、そしてそれらの革新と継承を担う人材育成システムは、プラハ美術工芸大学やボヘミア地区に所在する専門校の教育システムに構築されている(Petrova, 2005)。

付録1人材育成に関するアンケート調査の見本

(配布先によって固有名称が異なり質問内容が特色を考慮して多少異なる.)

基本情報について

Q1 年齢(10代, 20代, 30代, 40代~)

Q2 性別

Q3 所属コース

Q4 出身地(市内, 府県内, 隣接府県, その他)

Q5 最終学歴(高校, 専門学校, 芸術系大学, 一般大学美術系学部, 一般大学美術系以外学部, 芸術系大学大学院, 一般大学大学院)

Q6 専門工芸分野に関する家庭環境

Q7 他分野のアートに関する家庭環境

Q8 工芸関係の職歴

Q9 海外在住歴(国名と滞在期間)

現在の教育環境について (Q10 と Q10'はどちらか質問)

Q10 応募理由と現時点における満足度や要望

Q10' 住居の賃借有無とその感想

Q11 支援制度の活用有無と関心度(海外研修, 貸工房や工房開設補助金ほか)

Q12 海外教員や海外研究生に関する満足度や期待度, その理由

Q13 海外新進作家のアーティストインレジデンス(AIR)に関する満足度や期待度

Q14 先輩作家の日常的な指導や助言に関する満足度や要望

卒業(修了)後について

Q15 所属コースの修了後の進路(複数回答は3つまで可)

1. 進学(2. 進級, 3. 府県内の専門機関, 4. 他県の工房研修生), 5. 府県内工房職員,
6. 他府県工房職員, 7. 作家, 8. 企業就労デザイナー, 9. 起業家デザイナー, 10. 教育機関助手・
講師, 11. 海外機関助手・講師, 12. 家業就労, 13. その他

Q16 卒業後の定住希望の有無とその理由

Q17 地域に所在する工房やギャラリーとの関わり

Q18 地域に所在する美術館(芸術祭)との関わり

Q19 展覧会, 公募展やイベントへの出展歴や将来出展したい展覧会

Q20 地域に定住して制作活動をするうえで, 気が付いた点

付録2 工芸作家の経歴調査のテンプレート

| 番号 | 作家名 | 性別 | 年齢 | 専門 | 学歴 | 専門訓練 | 職業 | 出身 | 工房場所 | 兼務 | 助成受給歴 | 師匠 | 所属団体 | 公募展受賞など | 地域展示・販売会・顕彰 | 主な団体展 | 主な個展 | ワークショップ・レクチャー | 主なパブリックコレクション |
|----|-----|----|----|----|----|------|----|----|------|----|-------|----|------|---------|-------------|-------|------|---------------|---------------|
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

付録3 工芸環境の国内先駆地域における特色

| (万人) | 地理的・社会的特性 | | 工芸領域の | | 工芸実技を指導する大学 | | 工芸家育成機関 | | 公的ギャラリー | | 現代工芸品 | | 地域連携 | |
|------|-----------|--|---|--|------------------------|--|---|--|------------------------------|--|--|--|--|--|
| | 人口 | 文化土壌 | 政策的な位置づけ | | 芸術系大学・一般大学 | | 専門学校 | | 公的工房 | | 展示美術館 | | 工芸関連国際展 | |
| 京都府 | 254 | 工芸関連の事業所/関係者の大半が京都市内特定地区に集積 | 〇伝統産業の振興 「京都文化カプロジェクト」 | | NA | | 〇事業所就労(職人)に必要な基礎技術を修得させ、就業を斡旋する職業能力開発校 | | 〇国際工芸センター(京都市) | | 〇文化博物館(企画展一部) 〇伝統産業ミュージアム | | ? | |
| 京都市 | 138 | 〇大阪、神戸、滋賀の生産と国内外観光客の消費に関わる昼間人口増 「世界文化自由都市」 「京都市国際都市ビジョン」 | 〇「伝統産業活性化推進条例」(京焼・清水焼、漆、染織ほか) | | 〇市立芸術大学 〇私立芸術系大学が複数 | | 〇伝統産業技術者育成コース(京焼・清水焼、漆器、西陣織、京友禅)として事業所就労者を主対象 | | 〇陶磁器会館ギャラリー 〇みやこめっせ貸ギャラリー | | 〇京都国立近代美術館(企画展一部) 〇京都市京セラ美術館(企画展一部) 〇個人美術館 | | ? | |
| 岐阜県 | 203 | 〇関西、名古屋、北陸、首都圏内の各工芸産地・消費地への利便性 | 〇瑞浪市、土岐市、多治見市、可児市の産公連携による国際的な「セラミックパラー美濃」政策 | | NA | | 〇工業高校を母体とする専攻科で卒業生ほか社会人を対象 | | 〇セラミックパークMINO(多治見市) | | 〇現代陶芸美術館(多治見市) | | 〇国際陶磁器フェスティバル美濃(毎3年) | |
| 多治見市 | 11 | 〇美濃焼産地境界 〇名古屋圏が生活圏 | 〇美濃焼産地内の流通・文化発信拠点 | | NA | | 〇デザイナーと作家の育成ほか産業支援を対象 | | 〇市民工房ギャラリーヴォイス | | 〇美濃焼ミュージアム 〇タイルミュージアム | | 〇国際陶磁器フェスティバル美濃(毎3年) | |
| 石川県 | 111 | 〇県内多地域に特定工芸産地が点在 | 〇伝統産業(漆、金工、陶磁、染)の振興 | | NA | | 〇各工芸品主要産地に所在 〇九谷焼:優れた産業人材育成とデザイン開発を対象(能美市) | | 〇各産地に工房 〇しほのき迎賓館貸ギャラリー | | 〇九谷焼/漆芸美術館 〇各工芸産地市内立 〇県立美術館(金沢市)(企画展一部) | | OGO FOR KOGEI 北陸工芸祭典 | |
| 金沢市 | 46 | 〇文化観光都市 工芸家への支援による定住 | 〇「ユネスコ・クラフト創造都市」 | | 〇市立美術工芸大学 | | 〇世界に誇る工芸(陶芸、漆芸、金工、染、ガラス)を担う人とその拠点づくりを対象 | | 〇分野毎の貸工房 〇広坂ギャラリー | | 〇国立工芸館(金沢市) 〇加賀友禅会館 〇市立21世紀美術館内市民ギャラリー | | 〇21世紀工芸祭 〇世界工芸トリエンナーレ 〇国際ガラス展(公募展) | |
| 富山県 | 101 | 〇自然遺産、世界文化遺産、伝統工芸産地が点在 | 〇伝統工芸と生活工芸 〇デザイン開発 | | 〇国立大学芸術文化学部(高岡市) | | NA | | 〇デザインセンター(高岡市) | | 〇富山県美術館(企画展一部) | | 〇国際工芸アワード富山 OGO FOR KOGEI | |
| 富山市 | 41 | 〇北陸の経済中心地 収集家による美術工芸消費 | 〇(国際的な)「ガラスのまち富山」 | | NA | | 〇ガラス造形専修学校 | | 〇ガラス工房 | | 〇市立ガラス美術館 〇私立美術館 | | 〇国際ガラス公募展(毎3年) | |

NA: 該当なし; ?: 不明瞭; 美術館、ギャラリー、工房の名称は、スペースの都合により判別できる範囲にて簡略しており、正式名称ではない。

出所: 各行政機関および関係機関の公式サイトより主要な情報を可能な範囲で抽出(2023年7月1日付)。

参考資料

- 石川県立九谷焼技術研修所 HP, available at www.pref.ishikawa.jp/kutanike/kenshusho.html (2023 年 3 月 31 日最終確認).
- 金沢卯辰山工芸工房 HP, available at <https://www.utatsu-kogei.gr.jp> (2023 年 3 月 31 日最終確認).
- 菊池裕子「工芸再考ーアート、ポリティクス、ジェンダーの視点から」Go for Kogei 2022 シンポジウム講演, 2022 年 7 月 30 日.
- 京都市産業技術研究所伝統産業技術後継者育成研修 HP, available at tc-kyoto.or.jp (2023 年 3 月 31 日最終確認).
- 京都府立陶工高等技術専門校(陶芸大学校)HP, available at <https://www.pref.kyoto.jp/tokgs> (2023 年 3 月 31 日最終確認).
- 一, 事業概要(2016~2021 年度).
- 一, 陶校だより第 28 号.
- 岐阜県立多治見工業高校専攻科(陶磁科学芸術科) HP, available at <https://school.gifu-net.ed.jp/wordpress/tajimi-ths/senkou> (2023 年 3 月 31 日最終確認).
- 多治見市陶磁器意匠研究所 HP, available at <https://www.city.tajimi.lg.jp/ishoken> (2023 年 3 月 31 日最終確認).
- 外館和子『日本近現代陶芸史』阿部出版, 2016 年.
- 富山ガラス造形研究所 HP, available at <https://www.toyamaglass.ac.jp> (2023 年 3 月 31 日最終確認).
- 利光功『Bauhaus 歴史と理念』マイブックサービス, 2019 年.
- 中山公男監修『世界ガラス工芸史』美術出版社, 2006 年.
- 糸野博行『産地の変貌と人的ネットワーク』お茶の水書房, 2010 年.
- 前田厚子『地域の伝統を再構築する創造の場』水曜社, 2021 年.
- 一, 「持続可能な創造環境への政策と担い手確保ーグラス・アート・ヒルズ富山とセラミックバレー美濃」『文化経済学』, 2022 年, 42-54 ページ.
- 三好信浩「明治日本における工芸教育の思想と実践ーワグネルとその人脈」『比治山大学現代文化部紀要』2004 年, 1-22 ページ.
- Burke, Peter, *The Italian Renaissance Culture and Society in Italy*, 1986.(森田義之・柴野均訳『イタリア・ルネサンスの文化と社会』岩波書店, 1992 年).
- Hall, Peter, *Cities in Civilization*, Clays Ltd, 1998.(佐々木雅幸監訳『都市と文明 I』藤原書店, 2019 年).
- Florida, Richard. *The Rise of the Creative Class: and How It's Transforming Work, Leisure, Community and Everyday Life*, Basic Books, 2002.
- Markusen, Ann, "Sticky Places in Slippery Space: A Typology of Industrial District, *Economic Geography*, 72, 1996, pp.293-313.
- 一, "Urban Development and the Politics of a Creative Class: Evidence from a Study of Artists ", *Environment and Planning A*, 2006, volume 38, pp.1921-1940.
- Petrova, Sylva, "Captured Light and Space" *Czech Contemporary Glass*, Expo 2005 Aichi, Japan.
- Piore, M.J. and C. F. Sabel, *The Second Industrial Divide: Possibilities for Prosperity*, Basic Books, 1984(山之内靖・永易浩一・菅山あつみ訳『第二の産業分水嶺』ちくま学芸文庫, 2016).

-
- 1) 国内における 10 名以上の事業所による日用陶磁器総生産額は 2011 年の 370 億円から 2019 年が 268 億円, 2021 年が 261 億円と 10 年間で 3 割減となり, 2007 年生産額の 3 割に留まる. コロナ禍のピーク時 2020 年には 246 億円と, 同等生産額の減少は著しい(日本陶業連盟公式サイト, 2022 年 9 月 1 日最終確認).
 - 2) 工芸技術者(作家, デザイナー, 職人等)を育成する職業学校を本文では指し, 本アンケート調査では, 地方行政の文化政策や経済政策が強く反映される公立校に限定した.
 - 3) 公立芸術系大学及び多摩美術大学, 武蔵野美術大学の HP より募集状況, 進路・就職状況より総合的に判断した(2022 年 9 月 1 日最終確認).
 - 4) 本稿で議論される専門校と作家と関わりが深い地域所在の公立ギャラリーへのヒアリング調査より(前田: 2021, 2022).
 - 5) 全国規模で活躍する 30 歳~40 歳代で且つ, 富山県界隈を活動拠点とするガラス造形作家 19 名と岐阜県界隈を拠点とする陶芸作家 19 名の経歴調査は 2020 年度以降調査中. また京都府と石川県を拠点とする同等

-
- の陶芸作家 25 名は 2014 年～2018 年度に調査した(前田, 2021).
- 6)国公立芸術系大学 HP 入学試験結果より(2022 年 9 月 1 日最終確認).
 - 7)卒業生数名へのヒアリング調査(2020 年 7 月 30 日, 2021 年 7 月 16 日,11 月 24 日)より. 内容の詳細は前田(2022)参照.
 - 8)同校校長室にて(2021 年 12 月 14 日).
 - 9)同校事業概要(2016～2021 年度),「陶校だより第 28 号」,表 1; 表 2; 付録 2 より必要な情報を抽出.
 - 10)事業報告と()内の数値の相違は,アンケート回答者率に反映する(表 1). 後述する地元入学者数も同様の理由である.
 - 11)同校校長へのヒアリング調査 (2021 年 12 月 14 日).
 - 12) 2021 年 1 月に副所長, 2022 年 4 月にメールによる入手情報及び表 1; 表 2; 付録 2 より.
 - 13)1 年制の応用コースとして 2003 年度に開設された. 通常は 3 名定員であるが, 2017 年度以降は外国人特別選考 3 名を追加した定員とする. 研修は原則日本語で外国人には可能な範囲の英語で対応(同校所長への質疑応答より,2022 年 9 月 3 日), 年齢制限は 40 歳である.
 - 14)同校副所長への質疑応答より(2022 年 4 月 23 日).
 - 15)2019 年 10 月 9 日(同校訪問時), 2022 年 4 月 22 日(メール)に事務局からの入手資料及び表 1; 表 2; 付録 2 より.
 - 16) 注 5 の経歴調査より.
 - 17) 20 世紀初中期のチェコのガラス造形はウィーン工房やバウハウスの装飾がなく機能性を重んじる意匠や理論に強く影響される(世界ガラス工芸史, 147 頁).